

竹内吉正による欧州ホームヘルパー活動 事情視察の行程と成果

Itinerary and Results of Yoshimasa TAKEUCHI's Visits for Observation of
Home Helper Activities in Europe

中 畠 洋

Hiroshi NAKASHIMA

中京大学現代社会学部准教授

I はじめに——研究の目的と課題

竹内吉正（1921.1.15-2008.12.14, 以下, 竹内）は, 1955（昭和30）年7月11日に上田市社会福祉協議会（以下, 市社協）初代事務局長に着任して以降, ホームヘルプ事業を中心とした民間社会福祉事業の推進に携わり, 1961（昭和36）年4月3日に長野県社会福祉協議会（以下, 県社協）に異動後, 大蔵省貯蓄推進本部長長野県貯蓄推進員, 長野県公衆衛生専門学院講師, 長野県新生活運動委員会事業部長を兼務するなど幅広く活躍した。なかでも, 同県社協組織課長在任時の1969（昭和44）年11月22日に, 竹内はすでに, 欧米諸国の老人福祉の素晴らしさを察知し, 1971（昭和46）年11月4日～20日までの約2週間, 第1回欧州ホームヘルパー活動事情視察（以下, 北欧視察）に臨んだという（長野県ホームヘルパー協会1991:35）。そして, 帰国後, 視察報告のまとめや講演活動に奮闘し, 1977（昭和52）年3月まで県社協内の職務を全うするが, 彼の視察状況や海外から受けた影響がこれまで語られることはほとんどなかった。

ここで, 先行研究を概観すると, 同県下で1956（昭和31）年に始動した家庭養護婦派遣事業の起源及びその一端を論じた竹内（1974:51-69）をとり上げたものとして, 森（1972:31-9;1974）, 鎌田（1986:62-7）, 須加（1996:87-12）, 上村（1997:247-57）, 介護福祉学研究会監修（2002:33-44）, 山田（2005:178-98）, 荻原（2008:1-11）, 中畠（2010:71-83;2011:28-39;2012:75-85；2013；2014a・b；

2019:1-13), 西浦 (2014:101-10) などがあり, なかでも, 介護福祉学研究会監修 (2002:35) は, 「ときの長野県社会部厚生課長であった原崎秀司のアイデアが出発点であったが, 彼は先年欧米の福祉先進国を視察し, イギリスにおけるホームヘルプサービスについての実情をつぶさに見てきた」と原崎の慧眼を論ずるが, 竹内自身の着眼点や彼が行った北欧視察の詳細は見落とされてきた. 次に, 竹内を「当時の上田市社協事務局長であり本事業の実質的推進役」と位置づけた山田 (2005:194) からは, 同事業に対する功労者としての位置づけが示唆されるものの, 実質的推進役として彼が担った役割やそのプロセスが具体的に浮き彫りにされていない. その他, 「欧米諸国と比べて日本での導入は大幅に遅れたものの, 日本が高度経済成長期を迎えるに伴い, ホームヘルプを巡る環境にも変化の波が訪れた」とする西浦 (2014:102) もあるが, こうした変化の波を, 竹内ら同事業関係者がどう捉え, いかに対応しようとしたのかまでは詳らかになっていない.

つまり, 多くの先行研究が家庭養護婦派遣事業をわが国のホームヘルプ事業の嚆矢とするものの (須加 1996:90; 山田 2005:198 など), その後, 日本社会が高度経済成長を遂げようとした 1970 年代を中心に, 大きな社会変動のなかで同事業がどのように推し進められようとしたのかが十分に探究されておらず, その展開過程の全貌が明確になっていない. この点については, 同事業の実質的推進役を担った竹内に着目し, 彼がいかなる思想や認識の下, どのような役割を果たしていたのかを解明しなければ捉え切れまい. 例えば, 旧来の国内事情のみを捉えていた視点に留まるものではなく, 国外にまで射程を拡げ, 竹内が諸外国からいかなる影響を受けながら同事業を推進しようとしていたのか, あるいは当時の諸外国と日本との間にどれほどの懸隔があり, 将来の日本社会にとって必要な手立てをどう講じようとしたのかなどを, 竹内に関する第一次史料から精査しなければならない.

そこで, 本稿では, 1971 (昭和 46) 年 11 月に実施された北欧視察に着目し, 竹内による視察の行程やその成果の検証から, ホームヘルプ事業の推進をいかに企図しようとしたのかを具体的に解明することに主眼を置く. なお, 1971 (昭和 46) 年 12 月 8 日付の『信濃毎日新聞』記事を紐解くと, 「海外の老人たち」と題して, 竹内の北欧視察が大々的に取り上げられ (信濃毎日新聞社 1971:4), 彼が 6 ヶ国を訪問していたことが示唆される. 但し, この視察は家庭養護婦派遣事業創設から約 15 年後に行われた視察であるため,

制度の創設史というよりはむしろ、その運用面での関係者の試行錯誤にアプローチし得ると考えられ、法制度化の効果や影響が問われる昨今の社会福祉実践にも通じており、意味深い。

以上のような問題意識の下、本稿では、長野県下におけるホームヘルプ事業の推進者として竹内を位置づけ、彼が諸外国からどのような影響を受けたのかを北欧視察の行程及びその成果から具体的に明らかにすることを目的とする。研究方法は、視察当時に竹内が記した日誌『自由日記』（1971年10月7日～1972年11月12日、本論では自由日記）に加え、彼の視察研修の一端を報じた地元新聞記事（「海外の老人たち」『信濃毎日新聞』第32290号、1971年12月8日、第4面）、帰国後、彼が成果をまとめようとした草稿原稿（「ロンドン、スウェーデン、デンマーク、パリ、ローマ、スイス」『出典不詳』1971年及び「個への探究——欧州駆けある記から（その三）生活と伝統と」『出典不詳』1972年）などの第一次史料を用いる。

一方、研究課題は、①視察以前の竹内の問題意識の所在の解明、②竹内による北欧視察の行程及び着眼点の究明、③帰国後、報道された視察成果と竹内の苦悩の探究、④視察後における竹内の思索とホームヘルプ事業化との関連の検討、の4点である。これら4点から、高度経済成長期に竹内が北欧諸国から影響を受けながら、いかにしてホームヘルプ事業を中心とした民間社会福祉事業を展開しようとしたのかを考証する。倫理的配慮としては、竹内関連史料に関し、竹内の実兄の花里吉見氏から2009（平成21）年10月3日に使用許可及び研究の範囲内での公表の許可を得た。また、筆者の所属校の研究倫理審査委員会から承認を得た（中京研倫第2019-007号、2019年7月17日承認）。

Ⅱ 在宅老人問題の検討と壮行会開催

高齢化社会に突入した1970（昭和45）年のわが国では、「豊かな老後をみんなで築くこと」が老人週間目標とされ、福祉ビジョンや厚生行政の長期構想化が発表されるなど、高齢者施策が重視され始めていた。併せて、「老人家庭奉仕員事業運営要綱」（社会局長通知、40.4.1社老第70号）の通知をはじめ、ホームヘルパーの全市町村への配置、心身障害児家庭奉仕員制度の発足などの動きから、在宅福祉問題への関心の高まりが窺えた。一方、思想面では、住谷・右田（1977:159-219）が地域福祉や民間社会福祉を保健・医療

や住民運動から捉え、この他にも、住民の自発性、任意性、選択性と、行政の指導性との均衡に配慮した阿部（1978:256）、戦後社会事業思想の継承と創造を熟考した吉田（1979:498）などが注目され、民間社会福祉に身を投じた竹内自身も日々の業務や講演活動などに勤しんでいた。

このような社会背景の下、竹内は、1971（昭和46）年10月22日に長野県下を来訪した老人問題研究会メンバーへの対応に追われていた。そして、以下の如く、この会合から気づきを得たことが示唆される。

午前中は老人問題研究会のメンバーが来局する。五十名近くに達する。討議の中に老人福祉を考える上で重要な問題が多く含まれているのを知る。大きな動きの中にいるように思う。在宅老人問題が、どんな形になるのかが伺われて県内意識層の動きが若干理解できる。午後は企画調整会議が行われる。関東ブロックの事務局長会議の思想統一がはかられる。（自由日記：1971年10月22日）

上記の「老人福祉を考える上で重要な問題が多く含まれている」という文言に、県下の老人福祉施策に改善の余地が少なくないことが窺え、「県内意識層の動きが若干理解できる」から、今後の同県が目ざす方向性の把握及び思想統一を志向する竹内の内面を汲み取れる。

一方、竹内個人の問題としては、「大きな事を構えての事であるだけに業務上のことや旅行先のことなど、大変に忙しく奔走する。どうも公私の関係業務が追ってくる。風邪気味の喉を完治させるのに心をついやす。」と吐露し（自由日記：1971年10月23日）、竹内は健康面に留意しつつも、自身初の海外視察への期待を高める。そして、北欧視察のための旅券手続き（1971年10月7日）、ホームヘルパー日記の英訳依頼（企画調査係長竹下氏、同26日）、保険への入会（同）、県社協会長、県厚生課長への挨拶（同30日）などと、渡欧の準備を進めている。つまり、視察直前の竹内は、県下の老人福祉の不完全さを認識しつつも大きな転換期のなかで人々の思想統一の必要性を看取り、一方で、自身初となる海外視察を前に、自らの民間社会福祉事業を推し進める必要性を自認していた¹⁾。

このようななか、竹内は北欧視察の出発日を迎える。但し、一度の視察研修であり、しかも約2週間という極めて短期間での渡欧となるため、そこで

の収穫は未知数である。それ故、竹内は、異国での限られた学びに貪欲になろうとしたと考えられる。以下、北欧視察の行程、その成果、その後の展開の順に見ていく。

Ⅲ 欧州ホームヘルパー活動事情視察（1971.11.4-20）の行程

1 イギリス視察——ロンドン厚生局

老齢福祉対策推進要綱が発表された1971（昭和46）年10月31日に出発の朝を迎えた竹内は、最初の視察地であるイギリスに向かう。竹内自身、視察の全行程を書き留めていないが、帰国後、報道された地元新聞記事を紐解くと、「このほど社団法人老人福祉研究会主催、厚生省後援で、海外老人家庭奉仕員活動視察と、“老人の船”（洋上大学）の二つが催された。いずれも海外の老人福祉状況を見て回ったが、家庭奉仕員活動視察団に特別参加した県社協組織課長竹内吉正さん、“老人の船”に講師として乗り組（ママ）んだ老人クラブ指導者小林文成さん（伊那市）にその感想をきいてみた。西欧を回った竹内さんは『日本の立ちおくれを痛感』し、東南アジアを見た小林さんは『まだこちらの方が恵まれている』と対照的な意見だった。」と報じられ（信濃毎日新聞社 1971:4）、竹内が家庭奉仕員活動視察団の一員として、諸外国の老人福祉状況を見聞していたことが分かる。加えて、海外視察を終え、「日本の立ちおくれを痛感」という彼の言葉に象徴されるように、自国と諸外国との懸隔に驚嘆していたことが以下からも看取できる。

回った国はイギリス、スウェーデン、デンマーク、フランス、イタリア、スイスの六ヶ国。行ってみても、老人ホームの現状とあり方がこちらと根本的に違うのにびっくりしました。日本では生活力と身寄りがなければ、健康な老人を養護老人ホームへ入れますが、むこうでは健康老人はたとえ一人ぐらしでも、できるだけ家庭に置こうとする。もちろん、ホームヘルパーなど一人ぐらしが出来る環境も整えての上ですが……。 (同)

上記の「こちらと根本的に違うのにびっくりしました」にも、自国に比べ見聞した他国がいかに先進的であるかということを確認した竹内の思いが解読でき、さらに、竹内は、1971（昭和46）年11月4日、世界ホームヘルパー会長（当時）のミスター・ラクソン氏に会うべく、「ロンドン厚生局を訪問」する（竹

内 1971:「ロンドン」1). ここでは、「ホームヘルプ制度は始め、ボランティア（ママ）の団体が始められた。妊産婦とか、子供のいる人々を対象に始めた制度。1949年にナショナルサービス、国民保険制度によってホームヘルパーの制度が、妊産婦とか、子供のいる人々を対象に始めて、……」と史的展開を押しえつつ（竹内 1971:「ロンドン」1）、「第二次世界大戦によって多数の世界ボランティア（ママ）サービスが無給で婦人団体が始めた制度。1949年にナショナルサービスとは、イギリスの場合、国民保険制度によって妊産婦や子供の世話をするホームヘルパーである。」と戦後の動向を捉え直す（同）²⁾。

他方、視察前後にメモ書きされた記録物には、「ホームヘルプを現在の2倍にしなくてはならない。…（中略）…イギリスの場合、フルタイムの組織を作り、査察指導員が必要だと今まで気づかなかったが、その指導員を作る。指導員に適した訓練等相談にのるサポート（ママ）する。」と記され（竹内 1971:「ロンドン」2）、担い手の増員や訓練の重要性を認識していたことが窺える³⁾。その上で、自国との相違を次のように書き留めている。

そのことを顕著にみたのが英国だった。ロンドンの宿舎近くに、ケンジントン公園があった。…（中略）…柔らかい芝生のうねりは尽きるころがない。日本では「芝生のなかに入るべからず」と必ず立札されているところであるが、少年達が元気にサッカーしても全然構わない。時に芝生を手入れする老人に質問してみた。「線が実にきれいだ。何か特別の方法でもあるのか」と。そうしたら「いや、特別なことは何ひとつしていない。ただ、太陽と水のたまものだけ。そして五十年を見守って与えられた」と。（竹内 1972:11-13、鍵括弧内ママ）

この記述は彼の視察研修プログラムそのものというよりは、休暇時の何気ない出来事を振り返ったものだが、ここから、芝生の整備方法や規制のあり方においてすら、彼は自国との相異を汲み取っている。自然や自由を大切にするイギリスの国民性からも竹内は影響を受け、ロンドンのホームヘルプ制度をはじめとする社会福祉事業の歴史や課題などを学び取ろうとしていたと看取できる。

2 スウェーデン視察—ストラシヨナル年金受給者用住宅及びフーウップ女史宅

こうした自然環境や国民性からも刺激を受けていた竹内は、イギリス視察の後、スウェーデンに赴く。ここでは、「ストラシヨナル年金受給者用住宅」という“老人の町”を訪れ、①教育関係、②社会的活動、③スウェーデンの教会活動と人の教育、④音楽関係の4点に着目している(竹内 1971:「スウェーデン」1)。①では、「社会活動家を養成。社会に実際に役立つ大学と同じ程度の教育をしています。病院の実際的な事。250人の患者の実際的な看護の勉強をしています。外来の患者も受けている。月1,100人位の患者。これらが大きな事である。」と人材養成に注目し(竹内 1971:「スウェーデン」1)、②では、「その時の状況によって、各々によって訪問する。ホームヘルパーは原則として自分で頼むが、その現状により調べて依頼する。」(竹内 1971:「スウェーデン」2)、「日本の場合は、ナンシーとホームヘルパーとの間に立っている。先ず、本人の希望は、能力。こちらの判定によってヘルパーをまわす。看護婦はこない。必要であれば医者も看護婦もくるが、ナースの仕事にまかせられている。」などと(同)、専門職のみならず患者の自立性や本人の希望を重視する視点を看取している⁴⁾。なお、1971(昭和46)年11月8日の夜、所長フーウップ女史宅を訪問した竹内は、ここでも、自国と諸外国との差異を次のように実感する。

老人の町には老人病院、老人ホーム、アパートなど、老人の生活に必要な施設として郵便局や銀行まで整い、町全体が公園のなかに建てられていて、一、五〇〇人の老人が生活するという。この世界的に有名な施設長が女性で、活潑なフーウップさんなのである。…(中略)…プライバシーを大切に考える北欧の家庭には、突然の来訪者などは、ほとんど家庭に案内されないということであるが、特別の配慮だったらしい。日本では、お客を招待するとなると、まづ食物のご馳走や掃除整頓に、主婦は疲れきってしまうことが多いが、その夜は、紅茶、コーヒー、ジュースなど好みに応じてワインを注ぎ、少しの菓子が出される程度であったが、何故か非常に楽しい雰囲気醸し出されているのに気付いた。それは日頃から整備された調度品、家具への心遣いや、洗練された話術の巧みさなどが、たしかにそうさせているのであろう。つまり、生活の智慧というか、社交の仕方という面で相当の隔りを覚えた。(竹内 1972:3-6)

上記から、豊かな老後の礎になる生活環境の整備、洗練された話術、生活の智慧、社交性などにスウェーデンと日本との少なからぬ隔たりを竹内が感得しており、「物よりも心で歓待するというお互いの喜びについて、静かに反芻してみた。」との記述の如く（同：9）、心遣いのあり様を潜考する。加えて、居間の壁に飾られた大きな油絵についても、「お尋ねすると、フーウップさんは『私の幼いころの姿』だと答え、画笔をふるったのは『母親』で、きれいに額に収め、飾られている。片一方の幼児用靴下も、同じく母親が編んでくれたものと教えてくれた。こんなお二人の生活態度から、若い階層が受ける感化は、敬老とか孝行という道徳説教より、より以上に期待されるのではないだろうか。」（同：9-10、鍵括弧内ママ）と思考し、親子愛や生活態度そのものを熟思している。

3 デンマーク視察——老人ホーム及び老人国民学校

このように、親子関係や心理面への注視からも影響を受けていた竹内は、諸外国の先進性に敬服の念すら抱きつつ（竹内 1972:10-11）、次の視察地であるデンマークに向かう。ここでは、「……教養を理性だけの問題とせず、霊的生活の反復にまで高めて理解しようとする宗教家即教育者が多かった。スウェーデン・ストックホルムの宮殿の近くにあるルター教会の歴史や伝統も、それであった。…（中略）…そして超然として決して曲りも折れもしない線のようなのちを、これらの人々から等しく感ずる一人である。」と、歴史や伝統の重厚さに加え、超然とした人々の堅実な生活ぶりを看取している（同：15-17）。

反面、「1年間に老人ホームに30人位の老人が入所する。家庭の人と住むようにする事が一番望ましい、と又叫ばれている。だんだん死亡者が増えるのが、又増える事により次は自分ではないかと自殺する者が増加している。」と（竹内 1971:「デンマーク」1）、この国の問題点を危惧する。とりわけ、自殺者増を感知し、「老人は淋しいと云う事がいちばん大きい問題。お金の問題ではない。奥さんがいる人はいい。」などと記し（同：4）、当時のデンマークの社会福祉サービスが、そうした問題対応に追われていると竹内が認識していたことが看取できる。

4 フランス視察——パリ市公衆衛生局及び老人クラブ

こうした歴史や伝統の厚重さの一方、孤独や自殺といった問題が深刻化していると感じたデンマーク視察ののち、竹内は同国とは対照的な国を訪問する。その国こそがフランスであり、竹内自身、「フランスの老人福祉は、益々進む感じを受けた。」と記すほどであった（竹内 1971:「パリ」7）。この国での彼の主な視察先は、彼の記録物によれば、公衆衛生局、保健関係、社会保険（公衆衛生省）局、宗教団体、セバスチャン・バッハ老人アパート、老人クラブ、デイセンターなどであり（同：1-5）⁵⁾、なかでも、公衆衛生局の社会福祉局長と面会した竹内は、「ここにはホームヘルパー、査察指導員がおかれており、ホームヘルパーは家事と教育とを二つ持っている。それ等のため国家試験が必要である。家事を手伝うのは家庭の作業を助けるためのものであり、教育等女性労働者である。家庭奉仕員（英語ではワーカー）と云っている。」と記述し（同：1、丸括弧内ママ）⁶⁾、家事のみならず教育という役割をも果たし得る国家資格有資格者に着目している。

一方、人材養成に関し、「受講中の五ヶ月間は一ヶ月 12,000 フラン支給され修了後派遣されると、14,000 フランになる制度」と述べた池川（1960:26）に対し、竹内は「運営要領等が記入してある。政府、社会組織が助ける。ホームヘルパーの数 5,000 人。7ヶ月のトレーニングをしてその後試験をし、それにパスした人。ホームヘルパーの仕事にも二つがあり、母親の病気の時、子供を見る能力のない母親の家庭、父親が病気の場合、義務教育。14歳までの子供を持っているスイートホームの場合、ヘルパーが訪問している。又、ヘルパーの養成期間中は補助金が出る。保健その他から出る。」と記述し（竹内 1971:「パリ」2-3）、人材養成のあり方を具体的に学び取り、加えて、公的支援の厚さを感じている⁷⁾。

セバスチャン・バッハ老人アパートや老人クラブなどを訪問した竹内からは、個々人の自発性の尊重が行財政面に及ぼす影響までは捉え切れないものの、「外の人との交流が非常に良く出来ている。フランスはテンポは遅れているが、優れた物を作る。日常と町の老人達と同じように交流し楽しくするよう考へている。先ず、できない作品を教えているのではなく、むしろ老人達から教えて頂いている場合もある。」などと（同：5）、個々人の生活リズムや社交性、さらには老人の能力活用にも着目し、そうした人々の日常生活のあり方から思索していたことが窺える。

その一例として、竹内は、デイセンターを訪問した際、「このセンターでは週に二度、会合を持っている。現在入所している人々には義務はないが、その解決には、週に二度、体操の日を持っている。身体的に障害のある者は、小さなグループに分け、音楽に合わせて床にカーペットを敷いて、トレーニングの支度でやる。これらの体操をするには、それぞれの体の人のコントロールに基づいて体操をしている。フランスの老人福祉は、益々進む感じを受けた。」と記し（同：6-7）、定期会合、小グループ制、トレーニングなどにも注目しており、視察見学から、日本が摂取すべき具体的実践を想起しようとする。

5 イタリア視察——ローマの老人養護施設

上記の如く、フランスでは、老人福祉の進展から具体的な示唆を得ていた竹内は、次いで、イタリアを訪問する。ローマ市内を見聞した彼は、「老人養護施設を前後視察する。名前（勝利の家）又は休養の家とも云う。ローマ保護協会（補助）共産（プハハウス）、社会に眼をむける（外部に貧しい老人や乞食をなくす）。このやり方は、ソレンと同じである。規格統一（カバーが新しい感じ）これは見ての感じである。他国から訪問者がある為に品物を新しい物に替えたと思われる。」などと記し（竹内 1971:「ローマ」1、丸括弧内ママ）、社会主義国の実践や他国民への対応方法のあり様を推察している。

かつてこの国を訪れた池川（1973:59）は、「イタリアにおいては生活扶助の受給申請者に対して憲兵が家庭調査することがあった」と記述するが、竹内の視察からはそのような場面は窺えず、「実験、施設すべて入所している人は（ペンシヨナルハウス）（年金受給者）、ケアも反対（社会主義）、保護（年金の受給を発生している老人は少なくない）年金受給者でも年金だけでは食べられない人々、年金の受給者の入所は少なくない。国から補助をもらっている。この養護施設はまだ充実していない感じを受けた。」などと記され（竹内 1971:「ローマ」2、丸括弧内ママ）、社会福祉の遅れを感得していたことが読み取れる。

6 スイス視察——ホームヘルパー養成施設

先進性のみならず、諸々の課題にも注視しようとした竹内は、最後の視察国となるスイスを訪れ、ホームヘルパー養成施設などの教育現場の実状を目

の当たりにする⁸⁾。竹内は、「ホームヘルパースクール。スイスは税金が安い。労働者 1,500 フラン～1,600 フラン。」などと前置きした上で(竹内 1971:「スイス」1)、「ホームヘルパー(コミュニティ組織が進んでいる。キリスト教関係施設・団体等でやっているのが多い)。教会の数が沢山ある。宗教の所属がきまる。日本のホームヘルパーの訪問を非常に学校では喜んで迎える。」と記述し(同、丸括弧内ママ)、その養成については、「1部が私の教会、1部が公の仕事としてやってる。トレーニング(資格を持った者)2,000人がいて、スイス全部に存在している。2,000人のホームヘルパーが、この学校でトレーニングを受けている。」とスイス特有の養成方法に目を見張っている(同、丸括弧内ママ)。加えて、以下から、病状ごとによる分類やヘルパー派遣期間・時間の分類など、望ましい社会福祉サービスの実施方法をスイスの仕組みから習得しようとした様が窺える。

そのホームヘルパーは注意深く、養成(選抜されている)。重要な事は訪問指導は直接する事であって、これは日本と同じ事である。スイス制度(システム)指導者が集って会を持っている。それが日本と同じように家庭の中で助けるようなことが(構成)により少なくなって来た。人数が増加している老人が家庭に残っているのが今日の大切な課題となっている。そのような病人が病院に入るか、スイスでは3週間～4週間がホームヘルパー訪問に限定されている。1日を3ツに分ける。1晩中いる事はない。食事を対象の老人(家族の収入によってきまってくる)経費の一部は、市町村が補助している。労働条件とサラリーは、看護婦とかそのような人々に匹敵するよう考へているとの事。ホームヘルパーへの学校志願者は程度が良いと学長は語る。(竹内 1971:「スイス」2、丸括弧内ママ)

看護婦(現、看護師)と同等の労働条件や、ホームヘルパーの質の向上のあり方などから多くを学んでいた竹内は、1971(昭和46)11月20日、6ヶ国に及ぶ北欧視察を無事に終え、帰国の途につく。但し、各国の違いを認識しつつも、彼は必ずしも訪問したすべての国から先進性や効率性のみを摂取したわけではなく、遅れている国の実態や問題にも注視し、思考していた。この貴重な経験を踏まえ、竹内は、自国での社会福祉事業の推進方法を模索し、視察成果を具現化すべく、北欧視察報告書の作成に迫られることになる。

IV 北欧視察後の展開と竹内の熟考

1 『信濃毎日新聞』が報じた視察状況と竹内の苦悩

なお、北欧視察からの帰途のプロセスについては、竹内の記録物を紐解いても不詳だが、「その夢は欧州での外国人との生活の一つ一つや見る視察のものばかり。気持ちが全然内地に帰っていないのを知る。田中主事に今週いっぱい病欠勤を告げる。」との記述から（自由日記：1971年11月18日）、疲労困憊していた帰国当時の竹内の姿が想起される。反面、翌日には、「午前中に佐藤医院に出向き診察を受ける。午後森専門官より電話あり。その後の近況をご心配しての事ようであった。そのまともにも意を注ぐべきを想う。いよいよ出勤を前に諸準備の整えねばならぬを想う。」などと（同：19日）、視察のまとめや職場復帰を模索している。

その後、職場復帰を果たした竹内は、1971（昭和46）年12月3日に、信濃毎日新聞記者からの取材を受け、「信濃毎日新聞の小川デスク（文化部長）がやって来た。午前中たっぷりかかって新聞記事をとる。中々に頭のいい記者である。興味深く聞いてくれたし、よく解ったとってくれた。多くの資料を提供してくれた。」と記し（同：12月3日）、北欧視察を省察する機会に恵まれている。ここで、実際に報じられた取材内容の一部を抜粋すると、次のようになる。

日本でホームヘルパーが誕生したのは、昭和三十八年に老人福祉法が出来てからですが、むこうでは、母子家庭や子だくさんの家庭の主婦のお手伝いとして早くから発達しているんです。だんだんと老人の家庭を手助けするケースがふえて、今日に来ているわけですが、スイスでは九十年の歴史と伝統をもっています。ヘルパーの養成学校があって、四十週間の勉強（ママ）して資格をとるわけですが、庭の手入れ、各種洗剤の扱い方から注射の方法までビッシリ。在校中はかなりの実習手当てがもらえるのですが、やはりなり手がすくないとかで、寮など一流ホテル並みの施設にして気をひいていましたが…（中略）…。日本のヘルパーの訓練が年二、三回の研修会だけ。それも主婦のパートも多いという現状とは、格段の相違といえましょう。（信濃毎日新聞社 1971:4）

上記の「庭の手入れ, 各種洗剤の扱い方から注射の方法までピッシリ。」や「格段の相違」という文言に, スイスをはじめとする北欧諸国の先進性に対する日本の遅れを竹内が痛感していたことが認識でき, その一方, 「健康を害した老人は, イギリスだと老人病院へいれます(スウェーデン, デンマークなどでは“病人の家”とっています)。ここである程度回復すると, ハーフウェイ・ハウス(スウェーデン, デンマークでは“看護ハウス”)というところへ入れます。病院から家庭へ戻る中間施設で, 日本にはないものです。多くの療法士がいて機能訓練, 言語訓練, 作業療法, 理学療法などやるわけです。費用は老齢年金の不足分を自治体で補助するので事実上無料です。」などという報道から(信濃毎日新聞社 1971:4, 丸括弧内ママ), 日本と北欧諸国との差異が浮き彫りにされた。

反面, 「このように, いたれりつくせりの対策があっても, やはり老人の“孤独の悩み”はどうしようもない, という訴えを各国できました。」からは(同), 孤独問題の存在が看取でき, その打開策をデンマークのとり組みから構想した竹内の視点は, 以下のように具体的に示され, 注目される。

そのなかで注目したいのが, デンマークであちこちにつくりはじめている老人国民学校。音楽, フランス語, 弁論, 文化財研究などクラスが八つもあって, 地域社会と深く結びつく活動を進めていました。日本でもこうした集まりがないわけではないのですが, 老人国民学校の計画的, 科学的な運営, そしてよきリーダーの確保など, 今後十分に参考にしたい点と思いました。(同)

「今後十分に参考にしたい」と文章を締めくくった竹内からは, 一連の視察研修の成果を生かしたいという意気込みが窺え, そのためにはまず, その土台となる情報の整理が必要となるため, 彼は視察報告書の作成に奮闘する。但し, 「欧州旅行の記録報告はそれなりに時間のかかるものである」(自由日記: 1972年1月2日), 「吾は西欧諸国のまとめを何とかしたい」などと記され(同: 16日), 視察報告書のまとめがそれほど安易な仕事ではなかったことが窺い知れる。

2 森幹郎及び飯沢節子との関わり

このように、視察報告書作成に苦闘しつつ、竹内は、「多くの北欧での特徴的の老人福祉の内容を見る。又その内容についても森幹郎氏の主張するところが、明らかに覚える。」と（自由日記：1971年11月28日）、旧厚生省老人福祉専門官（当時）の森の見解に共鳴し、「老人実態調査」実施（旧厚生省、1971年6）、老人福祉法改正法公布（1972年6月）、厚生年金保険法・国民年金法改正法公布（1973年9月）などの当時の法制化の動きも捉えながら、森との接触を重ねる。具体的には、「森先生から電話あり（1971年12月19日）、厚生省の森専門官を訪ねる（1972年1月5日）、森先生と対話（同年3月23日）、森専門官から便り（同年4月25日）、森幹郎先生から電話あり（同年10月27日）」などに示唆され（自由日記：1971年12月19日～1972年10月27日）、視察成果のみならず、日頃からの親交が窺える。

その典型例として、「雑務に追われる日々、そして何となく追われる思いのする昨今、午前に机上に懐しいホテルコンチネントから便りが着いた。デンマークのコペンハーゲンのホテルである。厚生省の森専門官からの便りである。『老人の町』新聞に、吾が訪問したとき、所長に手渡した長野県のホームヘルパーの手記が転載され、それが同封されてあった。森専門官の配慮に感謝した。」との記述が挙げられ（同：1972年4月25日、鍵括弧内ママ）、ここから、官民という異なる立場の両者の相互理解や協働に基づいたホームヘルプ事業の推進並びに社会進展という構図を看取できる⁹⁾。

一方、北欧視察団員として竹内とともに渡欧し、日本ホームヘルパー協会会長をも歴任した飯沢節子（以下、飯沢）と竹内との関連も看過できない。例えば、視察前では「飯沢さんが北欧出発前にあいさつに来る」などと面会を果たし（1971年10月23日）、帰国後には、「飯沢さんの人生経験を聞き取る」（1972年1月28日）、「飯沢さんは活動的」（同：29日）、「岡谷の飯沢さんより電話あり」（同：31日）、「飯沢節子宅で夫婦と語り合う」（同年2月9日）、「家庭養護婦派遣事業の自主研修の場をもつための創立総会準備のため飯沢会長に電話指示するところ多し」（同：18日）、「飯沢さん、老人クラブで大きな主張」（同年10月16日）、「飯沢さんから電話あり」（同：27日）」などと（同：1971年10月23日～1972年10月27日）、互いの関連が窺え、こうした連携を図りながら事業推進に尽力していたことが読み取れる¹⁰⁾。なお、老人家庭奉仕員の力の結集に問題意識をもちつつ、竹内は、「関東ブロッ

クの老人家庭奉仕員の研修」に参加するなど（同：1972年3月22日）、帰国後も日々の業務や研修活動に奮闘している。

V まとめ——考察と今後の課題

以上、本稿では、竹内の日誌や論稿などの第一次史料を基に、彼の北欧視察の過程とその成果を実証的に検討した。竹内は当該視察研修を通じ、北欧諸国で社会福祉サービスが進んだ背景に、整った生活環境や伝統に即した人々の堅実な生き方があることをイギリス、スウェーデンから学び、トレーニングや体系的なホームヘルパー養成を通じ、人々の主体的な生活を実現する意義をフランスやスイスから汲み取っていた。そして、これら一連の視察体験から、1969（昭和44）年11月22日に察知していた「欧米諸国の老人福祉の素晴らしさ」を、具体的かつ体験的に習得することになった。

但し、それらは、単なる羨望としての素晴らしさではなく、近い将来、日本社会が実際に摂取すべき内容であることを竹内自身、身をもって学ぶ好機となっていた。「格段の相異」という文言に象徴される如く（信濃毎日新聞社1971:4）、北欧諸国に大きく後れをとっていると痛感した竹内は、今後、物質的にも精神的にも豊かな社会生活を構築するために、体系的な養成プログラム、多様な学習プログラム、地域社会と結びついた活動、計画的・科学的な運営、よきリーダーの確保などの必要性を想見し、これら一つひとつの実現こそが、ホームヘルプ事業を始めとする民間社会福祉事業の推進に不可欠であり、今後の日本社会の大きな参考になると考えていた。そこには、先進的な北欧諸国に感化された竹内自身による日常生活上のさり気ない創意工夫や、豊かな地域社会につながる個々人を捉えようとする視点、さらには効果的な社会福祉実践の担い手を養成するための系統だった教育内容の必要性の認識があった。一方、デンマークやイタリアなど、福祉施策の進捗が芳しくない国々の実態からも示唆を得ていたことが窺え、こうした竹内による一連の視察体験が、異国の人々の生き方や考え方の省察を通じ、社会福祉実践への理解の深化につながっていた。

本稿では、須加（1996:87-122）、上村（1997:247-57）らが把握しきれていなかったホームヘルプ事業の推進における諸外国からの影響を、竹内直筆の日誌という第一次史料を基に考究すべく、1971（昭和46）年11月4日～20日に行われた竹内による北欧視察の過程を、視察前の彼が着想していた「欧米諸国の老

人福祉の素晴らしさ」を具現化する契機として捉え直し（自由日記：1969年11月22日）、将来の日本社会の豊かさに必要な民間社会福祉事業の推進のあり方を竹内の思想展開の下に明らかにした。これは森（1974:3）や山田（2005:178-98）らが着目した原崎秀司による欧米社会福祉視察研修のみでは把握できない同事業の推進過程を照射し得たという点で、旧来の先行研究の空白部分を追記することができた。なお、わずか2週間ほどの視察研修であったため限界も見られたが、高度経済成長期にあつて、早急な社会福祉施策の構築・進展が求められたなかで、ホームヘルプという人々に身近な生活の場における福祉実践のモデルを海外で目の当たりにし、在宅福祉実践の方法の錬磨を異国の人々の暮らしを通じて省察していた竹内の体験は、人々の生活の質や生活の豊かさとは何かということを鋭く問うていた点でも注目に値する。

今後の研究課題は、帰国前後から情報交換をしていた飯沢、中村登代子と竹内との関連をはじめ、戦前の竹内の思想や生活、さらには、終戦後の闘病生活における、婦人宣教師ミス・ベーツとの邂逅や改心など、竹内の思想展開及び心境の変化を実証的に検討することである。

注

¹ 竹内の社行会の様子については、「事務局長を中心にかもめ寿司にて吾が社行会が開かれる（1971年10月20日）、組織課員としてかわりある人々が皆んな「樽」なる店によって社行会を開いてくれた（同27日）」などから窺える（自由日記：1971年10月20日～27日）。

² ここでの竹内からは、「イギリスでは1849年リバプールの『ユダヤ婦人慈善協会』が最初にホームヘルプサービスを短期罹病患者や出産援助が必要な女性を相手に始めた」という内容までは捉えられず（山田2005:185）、戦後、家庭奉仕員は地方公共団体の保健局の所管に属したとする池川（1960:23）とも見解が異なる。

³ 同国を視察した竹内は、「ホームヘルプのサービスはアブのような働きをする。」と（竹内1971:「ロンドン」3-4）、その業務範囲の広さを認識する。

⁴ 一方、③については、「礼拝堂を起点に何本かの道が延び、近親の面接者や地域からのボランティアが行き戻りし、かたわらの茂みには野鳥が戯れていた。このように、生活のなかにある貴重な伝統のようなものを、もっとも大切にし、そのことに偉大な価値観を認識している姿に、私は少なからず敬服の思いを深めた。」と記述し（竹内1972:10-11）、④については詳細が割愛されている。

⁵ 「初めは、宗教団体から始まる。1. 勇士（家庭）から始まった。2. ホームヘルパーの機関紙が発行される。3. どのようにホームヘルパー制度がなっていくか、今は家庭の母親を助けるホームヘルパーである。社会保険（基金その中から年金等を出す）」と（竹内1971:「バリ」2）、竹内はフランス視察からも多くを習得している。

⁶ ここでは、「保健関係、社会保険（公衆衛生省）局、民間団体から出ているヘルパーには、ドルで145ドル。幼稚園、託児所等で実習期間は2ヶ月。最後の時間実習期間をおえて、最後に国家試験を

受ける。それ等の日数を加算すれば一ヶ月、計7ヶ月間となる。」などと(竹内 1971:「パリ」1-2)、具体的な記述が見られる。

⁷⁾ 但し、ホームヘルパーの数を5,000人とした理由を、①この組織にはお金がなく、経済的にもゆとりがない。②若い女性が集まってこないの2点とし(竹内 1971:「パリ」3-4)、財政難や人材不足の問題を指摘し、「どの国もこの点同じである。」と日本との共通点として捉えている(同)。

⁸⁾ 「1882年、スイスは一番最初にホームヘルパーの制度を作った国であり、婦人の教会が病人、老人を助ける事から始めた。今日のホームヘルパーとなって活動し出したのは後になってからで、1952年には90人の会員でした。その当時プライベート、公の仕事でなく、私の教会として始めたのが、今日は550人になっている。」と(竹内 1971:「スイス」1)、スイスの史的展開を竹内は捉え直すが、スイスにおけるホームヘルプ制度の起源の探究については残された課題は少なくない。

⁹⁾ 一方、この頃の竹内は、講演活動にも力を入れ、「講演『西欧からの土産話』(1972年1月15日、長野救主教会)、講演『渡欧して一番印象的であったこと』(同年3月22日、関東ブロック老人家庭奉仕員研修会)、講演『北欧の国々の老人福祉』(同年5月3日、老人クラブ)、講演『ヨーロッパの老人と日本の老人』(同:21日、東部町老人クラブ大会)、講演『北欧の友と日本の友』(同:26日、県身体障害者大会)」などと記述する(自由日記:1971年10月9日~1972年5月26日)。

¹⁰⁾ その反面、「やはり老人家庭奉仕員の方々の力があちこちに散発して居り、それなりに大きな力となるはずであるのが、それがどうも社協側には行き届いていないのが現状である。誤解に誤解を生んでいるようである。」と(自由日記:1972年2月7日)、竹内が問題視している点も看過できない。

[史料]

信濃毎日新聞社(1971)「海外の老人たち」『信濃毎日新聞』第32290号、1971年12月8日、4。

竹内吉正(1971-1972)『自由日記』(1971年10月7日~1972年11月12日、本稿では自由日記)。

竹内吉正(1971)「ロンドン、スウェーデン、デンマーク、パリ、ローマ、スイス」『出典不詳』(草稿原稿)。

竹内吉正(1972)「個への探究——欧州駆けある記から(その三)生活と伝統」と『出典不詳』(草稿原稿)。

[文献]

阿部志郎(1978)『地域の福祉を築く人びと』全国社会福祉協議会。

Dexter, Margaret and Harbert, Wally (1983) THE HOME HELP SERVICE, TAVISTOCK PUBLICATIONS, London and New York, 1-15.

荻原順子(2008)「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』(6), 1-11.

- 池川 清（1960）「外国におけるホーム・ヘルプについて」『社会事業』43（7）,19-28.
- 池川 清（1973）「大阪市に家庭奉仕員が誕生するまで」『月刊福祉』56（3）,58-9.
- 介護福祉学研究会監修（2002）『介護福祉学』中央法規出版.
- 鎌田宣子（1986）「在宅福祉サービスの新たな展開——ホームヘルプ協会の活動を中心に」『調査季報』（91）, 62-7.
- 上村富江（1997）「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー』ミネルヴァ書房, 247-57.
- 金子光一・小館尚文編（2019）『新世界の社会福祉1 イギリス／アイルランド』旬報社.
- 松村祥子・田中耕太郎・大森正博編（2019）『新世界の社会福祉2 フランス／ドイツ／オランダ』旬報社.
- 森 幹郎（1972）「ホームヘルプサービス」『季刊社会保障研究』8（2）,31-9.
- 森 幹郎（1974）『ホームヘルパー』日本生命済生会社会事業局.
- 長野県ホームヘルパー協会（1991）『長野県ホームヘルパー協会二十年のあゆみ』.
- 中寫 洋（2010）「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」『日本の地域福祉』（24）, 71-83.
- 中寫 洋（2011）「ホームヘルプ事業の黎明としての原崎秀司の欧米社会福祉視察研修（1953-1954）」『社会福祉学』52（3）,28-39.
- 中寫 洋（2012）「竹内吉正における地域福祉論の形成過程と基礎構造」『日本の地域福祉』（25）,75-85.
- 中寫 洋（2013）『日本における在宅介護福祉職形成史研究』みらい.
- 中寫 洋（2014a）『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』久美.
- 中寫 洋監修（2014b）『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭養護婦派遣事業——長野県上田市資料1』近現代資料刊行会.
- 中寫 洋（2019）「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ——上田市社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に」『社会福祉学』60（3）,1-13.
- 西浦 功（2014）「老人家庭奉仕員制度の導入と伝播」『札幌大谷大学札幌飯谷大学短期大学部紀要』（44）,101-10.

- 齊藤弥生・石黒 暢編 (2019)『新世界の社会福祉3 北欧』旬報社.
- 須加美明 (1996)「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会関係研究』2 (1) ,87-122.
- 住谷 馨・右田紀久恵 (1977)『現代の地域福祉』法律文化社.
- 竹内吉正 (1974)「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」『老人福祉』(46), 51-69.
- 山田知子(2005)「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大學研究紀要 人間學部・文學部』(90), 178-98.
- 吉田久一 (1979)『現代社会事業史研究』勁草書房.

